

フィールド・ワークの相対化

原ひろ子

(文化人類学)

私が専門としている文化人類学では、いろいろなタイプの研究者が必要とされている。世界各地に住む人々の中で1~2年間の生活を共にして、特定のテーマを追求し、諸論文を民族誌の形でまとめ上げていくフィールド・ワーカー。一人の個人の個性が、もろに対象となる社会の文化や人々の個性とぶつかりあうので、どうも相性があるようだ。そこで、どこでフィールド・ワークをするのに向いているかという点でも、研究者の個性は多様である。そのほかに、自分は、フィールドに出ないでも、他の研究者たちが執筆した民族誌を資料として、世界の諸文化を比較する作業をする仕事もある。さらに、特定

の社会の文書や、文学作品などを、文化の構造の変化という視点から分析する作業を、主に図書館や書齋で行うといった仕事のしかたもある。

しかし、どのようなタイプの研究者にとっても、文化人類学におけるフィールド・ワーク、とりわけ異文化を、生の現場から掘り起こそうとするフィールド・ワークの成果が、この学問領域における共有の基礎的情報となる。

ところで、欧米でも日本でも、フィールド・ワーカーたちは、大海に小船で一人乗り出すようにして、フィールド・ワークの手法を模索し、秘伝・口伝のような形で、仲間たちと話し合うことが多かった。ハウ・ツーも

の御本家のような米国でも、フィールド・ワーク手法に関するハード・カバーの本が出版されるようになったのは1960年代半ば、ペーパー・バックの教科書が出るようになってからは1970年代に入ってからであった。日本では、ずっとずっとおくれた。昨年9月に出た佐藤郁哉による『フィールドワーク——書を持って街へ出よう』（新曜社）は、その意味でまことに貴重な本である。しかも佐藤氏が、心理学、社会学を経て、暴走族のフィールド・ワークをされたことが、文化人類学の手法を相対化し、言語化する上での強みであったのだろうと思う。